

ネット使用が高校生のソーシャルサポートに与える影響

○ 安藤玲子（お茶の水女子大学），高比良美詠子（メディア教育開発センター），
坂元章（お茶の水女子大学）

キーワード：使用目的別ネット使用、高校生、ソーシャルサポート、因果関係

問題

インターネット（以後、ネット）の学校現場や家庭への普及に伴い、子どもがネットに触れる機会が増大している。それに伴い、ネット使用が子どもの心理面や社会的関係にどのような影響を持つのかについての関心が高まっている。

成人を対象とした従来の研究では、ネット使用が攻撃性や抑うつ、孤独感などに悪影響をもつ（Wallace, 1999; Kraut et al., 1998）可能性が指摘される一方で、逆に孤独感が減少し、ソーシャルサポートが高まるといったポジティブな効果（Shaw & Gant, 2002）も指摘されている。このようにネット使用の心理面や社会的関係への影響についての知見は成人対象の研究で増えつつあるが、一致した見解が得られる段階には至っていない。また、子どもを対象とした研究に関してはまだ端緒についた段階といえ、特にソーシャルサポートなどの社会的関係への影響について検討した研究は乏しい。同期性と非同期性を兼ね備え、時間的空間的制約が少ないネットは、コミュニケーションツールとして非常に有用であり、ユーザーの社会的関係に大きく関わることが予想されるため、子どもを対象とした研究は急務であると考えられる。

これまでの子どもを対象としたネット使用とソーシャルサポートに関する研究は、病気や問題を抱える子どものサポートグループなどを扱ったものが主体である（例えば Tichon & Yellowlees, 2003）。一般の子どもの日常的なネット使用から得られるソーシャルサポートを扱った研究では、ネット使用が友人から受けるソーシャルサポートを増加させる効果を指摘した中学生対象のパネル研究がある（安藤ら, 2005）。この研究では、友人に関して、学校や塾などの対面で知り合った友人（オフの友人）と、ネット上で知り合った友人（以後、ネット友人）とを異なるサポート源として検討し、ネット使用が特にネット友人からのソーシャルサポートを引き出すことに有効であると指摘している。

そこで、本研究では、この研究を踏まえて、より発達段階の高い高校生を対象としてネット使用がネット友人とオフの友人から受けるソーシャルサポートにどのような影響を持つのかについて検討する。

なお本研究では、安藤ら（2005）の用いたソーシャルサポートの項目に、道具的サポート項目を更に追加して検討した。情報のやりとりが容易なネットでは道具的サポートをより得やすいのではないかと考えたからである。

また、ネットの使用に関しても、暇つぶしや逃避目的での使用を検討する必要性を考慮し、安藤ら（2005）の使用項目にこれらの項目を追加して検討することにした。

方法

対象者

2 波のパネル調査に参加した関東の私立高校 3 校の 1 年生 466 名（男子 284 名、女子 182 名）を分析対象とした。

調査項目

使用目的別ネット使用量 1) 学校の授業、2) 宿題や勉強、3) 趣味や興味のあることを調べる、4) ネット上で出会った友人とのやりとり、5) 家族やオフの友人とのやりとり、6) 新しい友だちや知り合いなどをつくる、7) 他にやることのないのでなんとなく、8) イヤなことを忘れるための目的での 1 週間のネットの総使用時間を「やっていない」から「3 時間以上」の 7 件法で尋ねた。

ソーシャルサポート 身近な他者からの情緒的サポートを主に測定する学生用ソーシャルサポート尺度（久田ら, 1989）から高校生が経験すると考えられる 13 項目に、勉強で生じた疑問への援助などの道具的サポート項目 5 項目を追加して 18 項目を用いた。そして、「ネット友人、オフの友人」が、自分に行ってくれていると思うそれぞれのサポートの頻度を「まったくない」から「よくある」までの 6 件法で尋ねた。

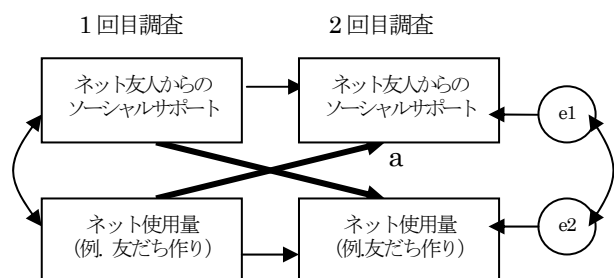


Fig. 1 交差遅れ効果モデル

結 果

因果関係の分析方法

ネット使用がソーシャルサポートに与える影響について、共分散構造分析を用いて検討した。分析には交差遅れ効果モデルを用いた (Fig. 1)。このモデルで、例えば 1 時点目の友だち作りのためのネット使用量から、2 時点目のネット友人からのソーシャルサポートへのパス a に有意な正の効果が示された場合、友だち作りのためのネット使用量が多いと、ネット友人からのソーシャルサポートが増加するという因果関係が推定できる。

因果関係

ネット使用がソーシャルサポートに与える影響 図 1 のモデルで分析したところ、次のような結果が得られた。

まず、ネット友人からのソーシャルサポートに関しては、ネット使用全体、趣味や興味のあることを調べる、ネット友人とのやりとり、友だち作り、暇つぶしや嫌なことからの逃避での目的でのネット使用が多いほど、ソーシャルサポートが増えることが示された。一方、オフの友人からのソーシャルサポートに関しては、ネット友人とのやりとりや友だち作りを目的としたネット使用が多いほど、ソーシャルサポートが減ることが示された。

表 2 目的別ネット使用量からソーシャルサポートへの効果

	ソーシャルサポート	
	ネット友人	オフの友人
使用目的別ネット使用全体	.21***	
授業		
宿題や勉強		
趣味や興味のあることを調べる	.15***	
ネット友人とのやりとり	.30***	-.09*
家族やオフの友人とのやりとり		
新しい友だちや知り合いをつくる	.20***	-.08*
他にやることがないのでなんとなく	.12**	
イヤなことを忘れるため	.14***	

注：ここでは、有意な効果がみられた場合の数値のみを示した。*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

考 察

本研究の結果、高校生では、ネット使用はネット友人とオフの友人からのソーシャルサポートに異なる影響を持つ可能性が示された。

まず、ネット友人からのソーシャルサポートへの効果についてみてみると、特にネット友人とのやりとりや新しい友だち作りなど、ネット上の対人関係との積極的なネット使用がネット友人からのソーシャルサポートを増

やしていたが、この結果はもっともらしく見える。そして、この結果は中学生を対象とした安藤ら (2005) の結果とも一致している。しかし、これらのネット上の対人関係へのネットの積極使用は、オフの友人からのソーシャルサポートに対しては、弱いながらも逆に負の影響力を持つことが示唆された。これは、中学生では見られなかった知見である。この結果から、高校生では、ネット上の対人関係に時間を使うほど、ネット友人との関係が深まるが、一方で、オフの友人との関係に費やす資源が減少し、関係が希薄化する可能性が示唆されたといえる。言い換えると、高校生ではネットを介した対人関係に慣れるにつれ、顔を合わせる機会が多くて関係の維持に気を使うオフの友人よりも、しがらみの少ないネット友人をソーシャルサポートのサポート源として頼るようになるのかもしれない。更に詳細な検討が必要な点である。

なお、畠山 (1998) は、現代の高校生は、困った状況にある友人への援助提供を惜しむつもりはないが、自分が困った状況に陥った場合の友人からの援助はあまり期待していない傾向があると指摘し、干渉されたくないという気持ちがある一方で、相手の心に影響を与えない「やさしさ」を重視するために、友だちに迷惑をかけたくないという気持ちが強いからではないかと解釈している。この解釈を本研究の結果に適用すると、高校生ではオフの対人関係にトラブルを持ち込まないために、ネット友人をサポート源として頼るようになるのかもしれない。

友人へ与えるソーシャルサポートについての検討と併せて、今後、更に検討を深めていきたい点である。

参考文献

- 1) 安藤玲子・高比良美詠子・坂元章 2005 インターネット使用が中学生の孤独感・ソーシャルサポートに与える影響 パーソナリティ研究, 14, 69-79.
- 2) 畠山 滋 1998 友人関係 深谷昌志 (監修) モノグラフ・高校生 53 「社会とのスタンスー高校生の社会意識」 ベネッセコーポレーション Pp. 66-72
- 3) 久田満・箕口雅博・千田茂博 1989 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み (1) 日本社会心理学会第 30 回大会発表論文集、143-144
- 4) Kraut, et al. 1998 Internet paradox: A social technology that reduces social involvement and psychological well-being? *American Psychologist*, 53, 1017-1031.
- 5) Shaw, L. H., Gant, L. M. 2002 In defense of the Internet: The relationship between Internet communication and depression, loneliness, self-esteem, and perceived social support. *CyberPsychology & Behavior*, 5, 157-171.
- 6) Tichon, J., & Yellowlees, P. 2003 Internet social support for children and adolescents. *Journal of Telemedicine & Telecare*, 9, 238-240.
- 7) Wallace, P. 1999 *The psychology of the Internet*. Cambridge, UK; Cambridge University Press.